基調講演

セクシュアリティ・ジェンダー・身体表現

石井達朗

ジェンダーとは概念であり，抑圧の手段であり，構築物であり，同時に，表現である。表現としてのジェンダーは，1.意図的であれ，無意識的であれ，日常的な表現（ex. 化粧，衣装，涙を流す，肩で風をきって歩く…など）と，2.意識化して，イコン，記号のコード，表象として，意図的に呈示されるものに分けられる。2を舞台芸術にあてはめてみる。身近なところでは，歌舞伎の女形は，社会通念としてのジェンダーを，男がイメージする様式的なフォルムとして定着させたと考えられる。バレエのポワントは，空気のようにとらえがたく，地上より，天上を志向する女性，意思をもった主体ではない純潔と恥じらいの姿態に，男性が夢みる女性が反映されている。これは，ヘテロセクシュアルな視線にさらされた「オブジェ」としての女性像であり，男性の側からのフェティッシュな願望がみてとれる。

20世紀初頭のふたりの踊り手は，20世紀舞踊の新しい流れを象徴している。イサドラ・ダンカンは，フェティシュな眼差しから自由になったことと，女性自身が振付けるということにおいて。ニジンスキーは，男性の側からのエロスの積極的な表現により，「フィーメイル・ゲイズ」を獲得したということにおいて。前者は，グラハムからバウシュ，マラン，ケースマイケルなどの女性の舞踊家／振付家の仕事に，後者は，ベジャール，ヌレイエフ，ジョルジュ・ドン，マイケル・クラークなどの活躍と女性観客の増大につながる。このようにしてみると，バランシンは，バレエ表現を技術とクォリテイ双方から変革した偉大な振付家である一方で，ポワントの美を最大限に完成させ，伝統的な「メイル・ゲイズ」を徹底させた「ヘトロセクシュアルな巨匠」であるといる。

最近かまびすしい「トランスジェンダー」ということも，以下のようにいくつかのレベルに分けると，より明確にとらえられるのではないか。1.日常のレベル。トランスセクシュアル（TS），シーメール（ニューハーフは和製英語），トランスヴェスタイト（TV），トランスジェンダー（TG）など（TS,TV,TGは重なることもあるが，紙面の都合でここでは説明を省略する）。2.制度として。アメリカ先住民社会のベルダーシュや現代インドのヒジュラ（社会／文化的に「第三の性」として存在する）。3.セクシュアリティに通底する表現として。レズビアンとかゲイの異性模倣（ブッチ，ドラッグクイーンなど）。4.芸能とかシャーマニズムの場で。能，歌舞伎，カターカリ，クーティヤッタム，バリやジャワの伝統舞踊，シャーマニズム（女装するシャーマンの存在がある），エリザベス朝の少年俳優，ミュージックホールやキャバレーなどの男装の芸人。

60年代初頭，ニューヨークのジャドソン教会に始まるI・レイナー，T・ブラウン，D・ゴードン，L・チャイルズ等のポスト・モダンダンサーは，トランスジェンダー的な表現を追及したわけではないが，物語性の放棄，遊戯感覚，意味から解放された動き，「タスク」としてのムーヴメントなどを希求するのに平行して，ジェンダー・ロールを意図的に無機化・異化していったのは，20世紀の舞踊史のなかでも注目すべきことである。アメリカのポスト・モダンダンスが衰退した以降（80，90年代）のバウシュ，そしてフランスやベルギーの現代舞踊では，因習的なロール・プレーイングを激しく展開させながら，新しい身体性を模索する傾向も見られる。さまざまな作品にてらして，そのような傾向をどうとらえるのかは，課題として残る。

結語。舞踊家としては，ジェンダーとかセクシュアリティの表現が，同性愛／異性愛にかかわらず，たんなる現実世界のシュミレーションになることなく，どのようにクリエイティヴで批判的な作業をそこに介在させてゆけるか。そのひとつの方法論は，ジェンダーやセクシュアリティを構築しているものを，いかにして舞踊という身体の行為のなかに露呈してゆくかということである。研究者としては，クラシックバレエ，モダンダンス，コンテンポラリーダンス，舞踏の研究もふくめて，批判を拒否する「芸術」神話／他者を寄せぬ「技術」談義に閉じ込めてしまうのでなく，どのような開かれた足場から新たな光を当て，入れ墨・ピアス・身体瘢痕などを含めた身体変工，過食症・拒食症などの摂食障害から芸術療法まで，ひろく身体にかかわることがらを（舞踊もふくめて），既成の枠組みをできるだけ取り外して読み直す作業をすることにより，開けてくる視界があるだろう。ジェンダーや性の問題は根源的なものだが，そのような視界のひとつにすぎない。